

群 教 セ	G09 - 05
	令 4.281集
	外国語 - 小

# 英語で「伝えたい」意欲をもち、「伝わった」達成感を味わい、主体的に学びをつなげる児童の育成

## ——空間的・時間的制約を超えた言語活動の設定、協働的な振り返りと学びをつなげる振り返りの工夫——

特別研修員 下平 祐子

### I 研究テーマ設定の理由

小学校学習指導要領解説外国語活動・外国語編（平成29年7月）では、外国語科導入の趣旨と要点の中で、「外国語学習においては、語彙や文法等の個別の知識がどれだけ身に付いたかに主眼が置かれるのではなく、児童生徒の学びの過程全体を通じて、知識・技能が、実際のコミュニケーションにおいて活用され、思考・判断・表現することを繰り返すことを通じて獲得され、学習内容の理解が深まるなど、資質・能力が相互に関係し合いながら育成されることが必要である」と示している。

研究協力校の児童は与えられた課題に意欲的に取り組もうとしているが、自己の学びを客観的、肯定的に捉えることができず、自信をもって思いや考えを伝え合ったり発表したりすることに課題がある。

そこで、本研究では、ICT端末を活用して、児童が本当に話したいと思える目的や場面、状況を設定する。ICT端末を活用することで、多様な他者とつながることが可能になり、児童が「伝えたい」と思える目的意識をもたせ、伝える必要感のある言語活動を設定できる。こうした実際のコミュニケーションにより近い場面や状況を創出することで、自分の英語が「伝わった」という達成感や自己肯定感につながると考える。また、児童が自らの学びを客観的に、そして肯定的に捉えられるように、協働的な振り返りの機会を設定するとともに、振り返りにおける児童の記述を次の指導に生かす工夫をする。これにより児童は、自分の表現に自信をもち、うまくできたこともできなかったことも含めて、次の学びに生かしたいという思いになると考える。

以上のことから、ICT端末を活用した言語活動の設定と振り返りの工夫を通して、自己の表現に自信をもち、主体的に学びをつなげる児童を育成したいと考え、上記のとおり主題を設定した。

### II 研究内容

#### 1 研究構想図



## 2 授業改善に向けた手立て

児童が主体的に学習に取り組むためには、児童が伝えたいと思える、より魅力的な場面を設定することが有効である。また、自己の学びを客観的、肯定的に捉えるためには、振り返りを行う際の形態を工夫したり、児童の振り返りを次の指導に生かしたりすることが重要であると考え

### 手立て1 空間的・時間的制約を超えた言語活動の設定

ICT端末を用いて、遠隔地にいる相手とコミュニケーションを図る言語活動の場面を創出する。普段は交流できない外部人材を含む多様な他者との交流が可能になるため、児童が本当に話したいと思える場面でコミュニケーションを図ることができる。目的意識をもたせ、伝える必要感のある言語活動を設定することで、「伝わった」という達成感や自己肯定感を高めることにつなげていく。

### 手立て2 協働的な振り返りと学びをつなげる振り返りの工夫

自己の学びを客観的、肯定的に捉えさせるために、協働的な振り返りの工夫と学びをつなげる振り返りの工夫をする。協働的な振り返りでは、ペア、全体、個人と形態を変えて振り返りを行わせることで自己の学びの成果と課題を客観的に捉え、より具体的な内容にできるようにする。また、学びをつなげる振り返りの工夫では、授業の始めやペア活動の途中に、児童の振り返りの記述に基づいた指導を行う。児童の振り返りの記述から「できたこと」を称賛することで児童の自己肯定感を高め、自分の表現に自信をもてるようにする。さらに「できなかった」ことは、次時の課題設定時や活動時に意識できるように指導することで、できなかったこともできるようになっていることを児童に実感させ、主体的に学びをつなげていけるようにする。

## Ⅲ 研究のまとめ

### 1 成果

- 学校内外の多様な他者につながり、交流する場面や状況を設定したことで、「伝えたい」という意欲や学習に対する前向きな姿勢が見られたり、「伝わってうれしかった」と全員が振り返りに記述したりしていた。このことから、多様な他者と交流する、目的意識と必要感のある言語活動を設定することが児童の達成感や自己肯定感を高める上で有効であると明らかになった。
- ペアから全体そして個人と形態を変えながら協働的に振り返りを行わせたことで、友達の視点を自己の振り返りに生かしたり、「なぜできるようになったのか」「どうすればできるようになるか」などの記述が加わったりするなど、振り返りの内容がより客観的で具体的になった。
- 授業の始めやペア活動の途中に、児童の振り返りの記述に基づいた指導を行ったことで、「自信をもって発表できた」「たくさん練習したから上手に発表することができた」など、自己の学びを肯定的に捉え、自信がもてたことが記述からうかがえた。また、学習課題を設定する際、前時の振り返りの記述から課題を設定することで、「前時にできなかったことをできるようになりたい」という主体的に学びをつなげようとする意欲を引き出すことができたと考える。

### 2 課題

- 機器操作で手間取ったり、相手が授業の意図や流れを理解していなかったりすると、ねらいを達成するための学習活動や指導が不十分になってしまうため、初めてオンラインで授業を行う際は、機器の操作や授業の流れ、留意点などについて丁寧な打ち合わせが必要である。
- 協働的な振り返りでは、ペアで振り返りを行わせる前に個人で振り返る時間を設ける必要があった。そうすることで、振り返りの視点が増えたり、振り返りの内容がより具体的になったりすることを児童自身に実感させることができると考える。
- 児童の振り返りから本時で意識させたい視点を提示する際には、複数の視点を一覧で示し、自己課題と関連のある視点到チェックを入れられるようなワークシートを作成し、活用させることで、児童が本時の課題をより焦点化できるようになると考える。

## 実践例

### 1 単元名 Unit5 “Where is the post office?” (第5学年・2学期)

#### 2 本単元について

本単元では簡単な語句や基本的な表現を用いて、建物の場所や位置をたずねたり、道案内をしたりすることができることを目指す。第1時の導入場面では、他校ALTから、市内のおすすめの場所を教えてほしい、というメッセージ動画をもらい、児童に紹介する。また、児童が英語で思いや考えを発表したくなる言語活動になるように、児童と共に活動の目的を考える。追究する過程では、どの道順をどのように説明すれば分かりやすく伝わるのか、また、どのような場所を紹介すれば興味をもって実際に足を運んでくれるかと思いを膨らませながら内容面と言語面から学習を進めていく。オンラインでの空間的・時間的制約を超えた交流を行うことで、実際のコミュニケーションの場面に近い言語活動が設定できることから、児童の「伝えたい」という気持ちの高まりや、自分たちの英語が「伝わった」という喜び、さらには、「また伝えたい」という思いを創出することができる。

以上のような考えから、本単元では以下のような指導計画を構想し実践した。

目標	他校ALTに市内のおすすめの場所への行き方を分かりやすく伝えるために、簡単な語句や基本的な表現を用いて、建物の場所や位置をたずねたり道案内をしたりすることができる。	
評価 規 準	(1) ①Where is～? Go straight for ～ block(s). Turn left / Turn right. You can see it on your left / right. の表現について理解している。(知識) ②場所や位置のたずね方や答え方、道案内についての表現を用いて、伝え合う技能を身に付けている。(技能) (2) 市内のおすすめの場所への行き方を相手に分かりやすく伝えるために、道順や方向などの伝える内容を整理しながら、道案内をしている。(思考・判断・表現) (3) 市内のおすすめ場所への行き方を相手に分かりやすく伝えるために、道順や方向などの伝える内容を整理しながら道案内をしようとしている。(主体的に学習に取り組む態度)	
過程	時間	主な学習活動
つかむ	第1時	・場所をたずねたり、答えたりするやり取りを聞いて、おおよその内容を理解する。 ・場所をたずねたり、答えたりするやり取りを聞いて、詳しい内容を理解する。
	第2時	
追究する	第3時	・探し物がどこにあるのかたずねたり、答えたりする。
	第4時	・道順や方向に関する簡単な語句や基本的な表現を使って道案内をする。 ・他校ALTで紹介したいおすすめ場所を地図アプリで探して道案内の表現を考える。
	第5時	
まとめる	第6時	・他校ALTで紹介したいおすすめ場所へ道案内し合う。 ・他校ALTにおすすめの場所を分かりやすく伝えるために、地図アプリを使い、伝える内容を整理しながらおすすめ場所へ道案内する。 ・世界の地図や標識について考え、世界と日本の文化の違いに対する理解を深める。
	第7時	
	第8時	

#### 3 本時及び具体化した手立てについて

本時は全8時間計画の第7時に当たる。他校ALTに市内のおすすめの場所への道案内をオンライン上で分かりやすく伝えることを目標とした。

##### 手立て1 Web会議システムを活用した交流の場の設定

Web会議システムを使用して、ペアごとに市内のおすすめの場所への道案内を行わせる。事前に地図アプリを活用させ、おすすめしたい場所への行き方を画面収録し、それに合わせて道案内ができるように練習を行わせる。当日は収録した地図アプリの動画を画面共有し、相手に分かりやすく伝えることができるようにする。

##### 手立て2 協働的な振り返りと学びをつなげる振り返りの工夫

前時の振り返りに記述された児童の言葉から、本時の課題を明らかにし、明確な目標をもって授業に取り組ませる。また、授業の終末で振り返りを行う際は、ペアでお互いに肯定的なフィードバックと学びの振り返りを伝え合わせ、その後全体で共有し、最後に、ICT端末に個々で振り返りを入力させる。

##### (1) Web会議システムを活用した交流の場の設定

第1時に、他校ALTによる市内のおすすめの場所への道案内をしてほしいというメッセージ動

画を視聴させた。本単元では、オンラインでALTの先生とつながり、英語でおすすめの場所への道案内をすることを伝え、児童とともに単元の目標を立てた。他校ALTと英語で直接やり取りをする場面や状況と、分かりやすく伝えるという目標を共有して単元の学習を始めた。

第5時では、画面越しでも分かりやすく道案内ができるように、おすすめしたい場所を地図アプリで検索させ、道案内の表現を内容面と言語面から考えさせた。その際、どのような道順で行くと相手にとって分かりやすいかなどについても考えを深めさせた。地図アプリを使用すると、実際の道や到着地点の写真が表示されるので児童は具体的に、より分かりやすい道順を想像しながら思考していた。第6時では、オンラインでの交流に向けて、地図アプリを動かしている様子を画面収録させた(図1)。

第7時の実際の交流では二人一組で全員が他校ALTにおすすめの場所へ道案内をした。一つのペアの交流時間は2分と限られていたが、全てのペアがしっかりと伝えることができた。図2、図3は実際のオンラインでの交流の様子である。道案内が終わると、他校ALTからコメントをもらったり、質問に答えたりすることができた。児童は初めてのオンラインの交流に戸惑いながらも、リアクションをしたり、時には教師の支援を受けながら質問に答えたりすることができた。

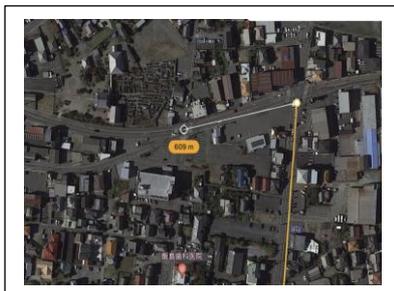


図1 画面収録時の画像



図2 交流の様子1  
(発表者のICT端末)

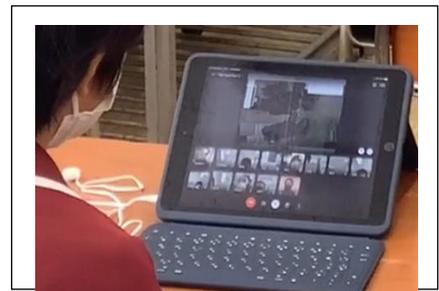


図3 交流の様子2  
(画面共有されたICT端末)

## (2) 協働的な振り返りと学びをつなげる振り返りの工夫

本時の課題を設定する際、前時に児童が記述した振り返り(図4、図5)から、本時で意識させたい視点を抜粋し、提示した(図6)。また、終末の振り返りでは、まずペアで本時の学習についての振り返りを行い、その後、クラス全体で各ペアの振り返りを共有した。クラス全体で共有することで、振り返りの視点が増え、より具体的な内容になることを目指した。最後に、全体で共有した振り返りの視点を踏まえて個人で振り返りを行わせた(次ページ図7、図8)。

・相手に聞こえやすく話す  
声をもう少し大きくする  
・クリアボイスで2人で声を  
そろえて、聞きやすく!

図4 前時の児童Aの  
振り返り

・さらに声を大きくする。  
・聞こえやすくするように  
クリアボイスを心がける。  
・2人の声を合わせる。  
・なめらかに言えるように頑張りたい

図5 前時の児童Bの  
振り返り

・相手が聞きやすいように意識する。  
・到着の場所がわかりやすいように画面を気をつける。  
・さらに声を大きくする。その時に、  
クリアボイスを心がける。  
・2人の声をそろえる。  
・なめらかに言えるようにする。

図6 本時の課題  
(振り返りの抜粋)

- ・少し緊張したけど自分なりの大きな声で言えた。2人で声を合わせてできた。[ ]に聞こえやすく分かりやすく案内することができた。
- ・聞こえやすく分かりやすく案内できたのは協力して練習したからだと思った。

図7 本時の児童Aの振り返り

- ・最初だったから緊張したけどしっかり伝えられてよかったです。
- ・相手に聞きやすく言えてよかった。
- ・Meetを上手く使って伝えられた。

図8 本時の児童Bの振り返り

## 5 考察

### (1) Web会議システムを活用した交流の場の設定

オンラインで他校ALTと交流する場を設定したことで、実際のコミュニケーションに近い場面と状況を創出することができた。児童の振り返りには、「〇〇先生に分かりやすくおすすめの場所を伝えたい」「紹介する場所の情報をたくさん調べてみたい」など、言語活動や単元の学習に対する意欲の高まりが見られた。

また、ICT端末を活用した空間的・時間的な制約を超えて外部人材とつながる言語活動を設定したことで、全員が他校ALTと交流することができ、「伝えたい」ことが「伝わった」という達成感をもたせることができた。言語活動後には、「とても緊張したけどたくさん練習したから伝えられた。紹介したところに行ってくれると嬉しい」「相手に聞きやすく言えてよかった。伝わって嬉しかった」と振り返りに記述していることから、これまでの学びや自分の表現を肯定的に捉えられていることが分かる。

### (2) 協働的な振り返りと学びをつなげる振り返りの工夫

協働的に振り返りを行わせたことで、初めは「楽しかった」「できてよかった」など、感想のみの浅い記述であった内容が、「家で何度も練習したから分かりやすく伝えられた」「ちゃんと聞こえるように、大きい声で言えたので伝わった」「たくさん練習したからすらすら言えた。道案内が分かりやすかったと〇〇さんに言われて嬉しかった」など、「なぜできるようになったか」の視点が増えた。このことから、ペアから全体、最後に個人で振り返りを行わせたことにより、自己の学びの成果と課題を客観的に捉える視点が増え、より具体的な内容で振り返りを記述することができたと考える。

また、前時の児童の振り返りから本時のポイントを示したことで、児童は本時の課題を自分事として捉えることができ、課題を解決しようと意欲的に学習活動に取り組むことができた。ある児童は、「緊張してうまく伝えられなかったので、次は声の大きさやアイコンタクトに気を付けて伝えたい」「家や休み時間にもっと練習したい」と振り返りに記述していた。このことから、児童の振り返りの記述に基づいた指導を行ったことは、自己の課題解決を図るために主体的に学びをつなげようとする態度の育成に有効であったと考える。